

Bible Navi

第4課

**本物の弟子に  
なるには？**

狭い門と広い門



世の中に、多くの聖書教材が存在しますが、  
聖書の真の意味を教えている本はどれほどあるでしょうか？

### Bible Navi 32シリーズは

アルマゲドン戦争、獣の像、666、  
この世界になぜ苦難があるのか、偽キリストの存在、  
ニューエイジ運動、イエスキリストの再臨、十字架の真の意味、  
生まれ変わったキリスト者の生活、聖書の預言と世界歴史の成就、  
地獄の真実、創造と進化、健康的な生活、  
「アメリカが聖書に預言されているのか？」  
七年の艱難は聖書的だろうか？」など、  
是非知っておくべき真理を集めました。

真理を探しておられますか？  
この32シリーズを通して、永遠の生命を与えて下さるキリストに  
お会いできますことを祈っております。

### Bible Navi 32シリーズ

編集 SOSTV Japan Mission

TEL 050-1141-2318

Mail [sostvjapan@outlook.com](mailto:sostvjapan@outlook.com)

HP [sostvjp.net](http://sostvjp.net)



# 本物の弟子になるには？

狭い門と広い門

# Contents

## 第1部 誰が真のクリスチャンなのか？

---

- ① 本物のクリスチャンとは？ 3
- ② 高価な恵みを求めて一恵みの真の意味 9
- ③ ルターの召命 10
- ④ 誤解されているルターの信仰 12
- ⑤ 安価な恵みが招いた災難 14
- ⑥ 救いを取り去る安価な恵み 17
- ⑦ 尊い恵みーほんとうの恵みとは 18

## 第2部 真のクリスチャンの道

---

- ① 真のクリスチャンは十字架を恥としない 20
- ② 真のクリスチャンは茨の冠の福音を信じる 21
- ③ キリストを受け入れるとは？ 22
- ④ 真のクリスチャンは主の『仕事』より『主』に優先順位を置く 24
- ⑤ 神様を黙想すること 25
- ⑥ 活動主義の犠牲者たち？ 25
- ⑦ 真の霊的クリスチャンとは？ 26
- ⑧ 無料交換 27
- ⑨ 真のクリスチャンは信仰の基本に忠実である 28
- ⑩ 真のクリスチャンは変化を信じる 28

## 第1部

# 誰が真のクリスチャンなのか？

1

## 本物のクリスチャンとは？

**今**日ほどキリスト教が人々から評価され、あこがれを持って受け入れられている時代はなかったでしょう。若い人たちの多くが教会式の結婚式を希望し、クリスマスには日本中で(お寺でさえも!)キリストの誕生を祝っています。そして、韓国などでは、事業の成功を願ったり、商売の繁盛のために教会へ行く人や、大教会の会員であるという名誉を得るために教会員になる人もたくさんいるそうです。そのような人たちは、手軽に教会員になり、この世の繁栄も天国も手に入れたと思って自己満足しています。このように、多くのクリスチャンは、本当のクリスチャンが実際にどのようなものであるのか知らずに教会生活を送っているのです。

クリスチャンとはキリストと同じ生き方をする人、すなわち、キリストのような人生を生きる人を指します。適当にこの世ともうまく歩調を合わせながら、教会へも通っているような人ではなくて、自分を捨て、自分の十字架を背負って、イエス・キリストに従っていく人であり、キリストに従うことの意味を知っている人、その困難と忍耐を知り、また喜びと希望を知っている人のことです。そのような人こそが真のクリスチャンです。

クリスチャンとは、イエス様を信じ、喜んでイエス様に従う人たちです。自分自身の意見や、ある人間の学説に従う人たちではありません。クリスチャンとは、自分の好き勝手に生きる人たちでなく、イエス・キリストの生涯の模範に従って生きることを決心した者たちです。世間に調子を合わせて、便利さや安楽を目的にして生きるのではなくて、神様が願い、また提示して下さる道に従って生きる者たちです。人がイエス様を救い主として受け入れるとは、同時にイエス様を自分の主人であり王として受け入れることを意味しています。



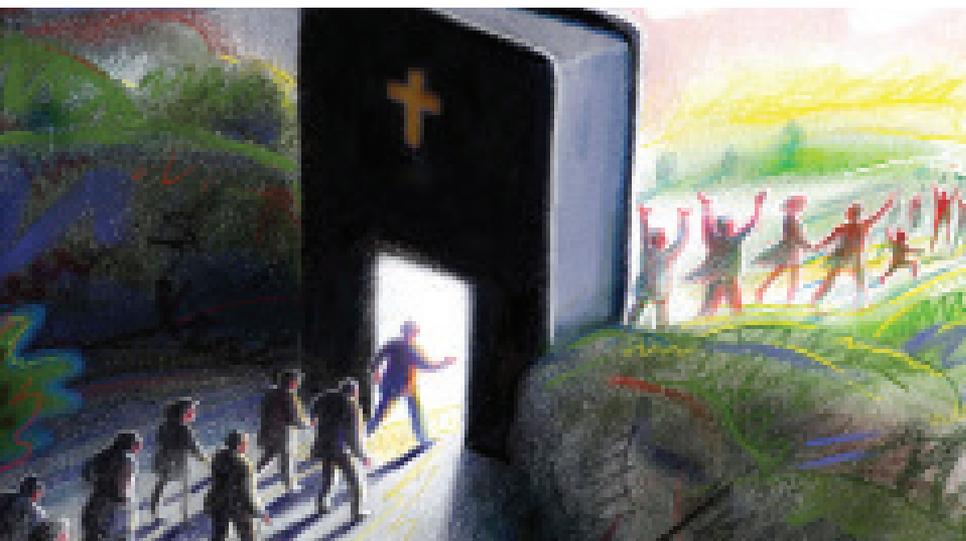
ですから、真実のクリスチャンの歩みと、この世の間にはいつも何かの戦いがあるものです。

ところが現代のキリスト教会には、イエス様の言葉を自分の都合に合わせて、自分勝手に信じるクリスチャンたちがあふれている、異常な姿になってしまいました。ある教会は、会堂を大きくきらびやかにし、大聴衆を集めますが、そこに真の魂の改変はなく、謙遜と敬神の聖霊の実が見られません。またある教会では、奇声を上げ興奮して騒ぎまくり、それが聖霊を受けたことだとされています。

私たちはここでもう一度、何がほんとうのクリスチャンの生き方なのか、聖書に帰ってみる必要があります。イエス様は、クリスチャンの生涯について次のように語られました。

「狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく、その道は広い。そして、そこからはいって行く者が多い。命にいたる門は狭く、その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない」(マタイ7:13、14)。

この言葉の実践的な意味は、この世は、クリスチャンたちが暮らすには適当でない世界であり、そこで生きるためには様々な困難が伴うということです。彼らがこの世で生きるためには、多くの犠牲が必要とされるということです。クリスチャンたちが追求する喜びと楽しみは、この世にあるのではなく天国にあるという意味です。心が新しく生まれ変わり趣味や好みが変わっていない人たちは、クリスチャンの生涯を生きることが出来ないという意味です。安易に、そして楽に生きる道は滅亡の道であると語られたのです。



使徒パウロも次のように言いました。「このように、あなたがたはキリストと共によみがえらされたのだから、上にあるものを求めなさい。そこではキリストが神の右に座しておられるのである。あなたがたは上にあるものを思うべきであって、地上のものに心を引かれてはならない。あなたがたはすでに死んだものであって、あなたがたのいのちは、キリストと共に神のうちに隠されているのである」(コロサイ3:1～3)。

この世でも十分楽しみを味わい、天国へも行きたいという態度で過ごすクリスチャンは、滅亡の道を歩んでいるのです。救いを得る道は、中途半端な道ではありません。自分の都合の良いように信じたり、適当に信じるといような考え方は、信仰とは言えません。私たちが受け継いできた真理は、血に染まったものです。どれほど多くの信仰の先輩たちが、自分たちの命を捧げて信仰と真理とそして標準を保ってきたことでしょう!従って私たちは、これらの信仰の先輩方に、負債を負っている者たちなのです。

ある日イエス様が弟子たちと一緒に道を歩いておられると、一人の人が質問して来ました。「主よ、救われる人は少ないのですか?」(ルカ13:23)。昔も今も人間が最も知りたいことは同じであることがよく分かります。これに対してイエス様は、主に従う弟子の道、つまりクリスチャンになるためにはどんな覚悟が必要かということ、明瞭に説明して下さいました。

「そこでイエスは人々にむかって言われた、『狭い戸口からはいるように努めなさい。事実、はいろいろとしても、はいれない人が多いのだから』」(ルカ13:24)と語られました。

その後大勢の群衆に向かって、この狭い戸口からはいることの意味を、詳しく語られました。

「大ぜいの群衆がついてきたので、イエスは彼らの方に向けて言われた、『だれでも、父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分の命までも捨てて、わたしのもとに来るのでなければ、わたしの弟子となることはできない。自分の十字架を負うてわたしについて来るものでなければ、わたしの弟子となることはできない。あなたがたのうちで、だれかが邸宅を建てようと思うなら、それを仕上げるのに足りるだけの金を持っているかどうかを見るため、まず、すわってその費用を計算しないだろうか。そうしないと、土台をすえただけで完成することができず、見ているみんなの人が、『あの人は建てかけたが、仕上げができなかった』と言ってあざ笑うようになろう。また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えるために出て行く場合に

は、まず座して、こちらの一万人をもって、二万人を率いて向かって来る敵に対抗できるかどうか、考えて見ないだろうか。もし自分の力にあまれば、敵がまだ遠くにいるうちに、使者を送って、和を求めるであろう。それと同じように、あなたがたのうちで、自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない。塩は良いものだ。しかし、塩もききめがなくなったら、何によって塩味が取りもどされようか』  
(ルカ 14:25～33)。

イエス様に従うということの意味は、非常に明白です。イエス様は、従う前に、まずどのような代価を支払わなければならないかということを確認に提示されました。神様と親や兄弟の間でどちらをとるか選択しなければならない立場に置かれた時に、神様を優先しないことは弟子としてふさわしくないと言われました。自分の欲を捨ててイエス様に従う時、自然に背負って行くべき十字架が示されます。それは自分の誇り、自我を死なせる道です。それは多くの場合、かつて十字架を背負うことがそうであったように、屈辱の道です！



クリスチャンというのは、自分の持っている全てが神様のものであり、また主の憐みによってそれらを所有することができたという事実を徹底的に理解している人です。彼らは自分の財産や時間や才能などのすべてが主から賜ったものであり、神様の栄光のために用いるべきであることを認めて従う者たちです。このような、弟子になるための代価についての教えがはっきり語られなかったり、あるいは教えられなかったとしたら、教会はたちまち世俗と同じになり、世の人々と教会員の間での区別がつかなくなるほど墮落してしまうのです。

一人の青年が、愛する恋人に次のような手紙を書いたそうです。  
「愛するあなたよ、私はあなたが恋しい！私はあなたに会うためならエベレストより高い山も越えて行き、太平洋よりさらに広い太洋であっても泳いで行きます！私はあなたが恋しい！」そしてその手紙の最後に次のように書いたそうです。  
「追伸：今度の水曜日あなたに会いに行きます！雨が降らなければ・・・。」

どんなに笑えることでしょうか！しかし多くのクリスチャンが、そのように過ごし

ているのではないのでしょうか？口先では主を愛し信じますと言っても、実際には、小さなことで神様を否定しながら過ごしているのではないのでしょうか？安易な生活や世の中での楽しみ、そして他の人たちから認められたい欲望などで、クリスチャンたちは日々イエス様を裏切っています。それにもかかわらず教会は、まるでイエス様の十字架を背負っていく人のように、十字架を教会の屋根の上に高く掲げて宣伝しているのではないのでしょうか！果たして自分たちは、真にイエス様を信じる者であるかももう一度探ってみなければなりません。

現代のクリスチャンは、まさにイエス・キリストの再臨を目の前にして生きる人たちです。神様にお会いするための準備をして生きるべき時を過ごしているのです。預言者アモスは次のように叫びました。「イスラエルよ、あなたの神に会う備えをせよ」(アモス4：12)。私たちは天で聖なるみ使いたちと隣り同士になって生きる者です。イエス様がこの地へ初臨なさった時、その道を備えるために召されたバプテスマのヨハネは、悔い改めのメッセージを語りました。彼はユダヤ人たちが、やがて来られるメシヤを受け入れることができるように、改革とリバイバルを促す悔い改めのメッセージを宣言したのです。

彼の働きについてイザヤ書にはすでにこのように預言されていました。「それは、預言者イザヤの言葉の書に書いてあるとおりでである。すなわち『荒野で呼ばれる者の声がする、『主の道を備えよ、その道筋をまっすぐにせよ』。すべての谷は埋められ、すべての山と丘とは、平らにされ、曲ったところはまっすぐに、わるい道はならされ、人はみな神の救を見るであろう』(ルカ3：4～6、イザヤ40：3～5)。

そうです。山のように高くなっている、私たちの高慢な心が低くされなければなりません。谷のように深くくぼんでいる、下心と利己心が埋められ平らにならなければなりません。妥協しながら適当に暮らしている曲げられた心は、真っすぐに伸ばされなければなりません。そして石ころだらけのでこぼ道のように、荒々しく角張った品性は、きれいに整えられなければなりません。神様を迎える心の道は、平坦にされなければなりません。

「さて、ヨハネは、彼からバプテスマを受けようとして出てきた群衆にむかって言った、『まむしの子らよ、迫ってきている神の怒りから、のがれられると、おまえたちにだれが教えたのか。だから、悔改めにふさわしい実を結べ。自分たちの父にはアブラハムがあるなどと、心の中で思ってもみるな。おまえたちに言うておく。

神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子を起すことができるのだ。斧がすでに木の根もとに置かれている。だから、良い実を結ばない木はことごとく切られて、火の中に投げ込まれるのだ』(ルカ3:7~9)。

クリスチャンが、世の人々が好むようなテレビ番組を同じように好きになって、神様を信じない人たちが聞いて笑うような冗談やコメディショーなどを見ながら、ゲラゲラ笑っているなら、クリスチャンと世の人との間に何の違いがあるでしょうか？世の人たちと同じく流行の服を身に着け、神様の恵みで内なる人を飾るのではなく、高価な宝石や装身具、指輪、イヤリング、ブレスレット、首飾り、高価な時計などで身を飾っているなら、私たちはどうしてこの世に向かって、イエス・キリストの来臨を伝えることができるのでしょうか？

宴会の席で酒を飲みタバコを吸いながら、どうやってキリストの弟子だと言えるのでしょうか。体をゆすりながら、自己陶醉や自己満足的な流行歌を口ずさみながら、どうして私たちが天に向かって歩いている聖徒たちであると言うことができるのでしょうか。体を過度に露出させる短いスカートや上衣を着て、どのような思いで神様を礼拝する教会の門を入るのでしょうか？

そのような服装は、礼拝を捧げる人たちのためにデザインされた物ではありません。そのような服装は偶像を崇拜する世の人々によって、異性の目を引くためにデザインされた服装です。今日の教会は、聖書の標準から余りにも遠く離れ出てしまいました。私たちは、もう一度宗教改革が必要である時代に生きていると言えるでしょう。なぜなら、イエス様がまもなく再び来られるからです。今の時代は、真の悔い改めを促す、第二のバプテスマのヨハネが必要な時代なのです！

マタイによる福音書13章には、他のイエス様の訴えの言葉が記されています。「天国は、畑に隠してある宝のようなものである。人がそれを見つけると隠しておき、喜びのあまり、行って持ち物をみな売りはらい、そしてその畑を買うのである。また天国は、良い真珠を捜している商人のようなものである。高価な真珠一個を見いだすと、行って持ち物をみな売りはらい、そしてこれを買うのである」(13:44~46)。宝が隠された畑を、この農夫はいくらで買ったのでしょうか？百万円？1千万円？違います。その畑の値段は、その農夫が持っていたすべてのものでした。

聖書にある「良い真珠のたとえ」の真珠も、同じように自分の全てをもって購入しなければなりません。真理と永遠の命の代価は、つまりキリストの弟子になる代価は、自分の以前の生涯を完全に放棄して、イエス様の道に立つことです。

そして聖書はその道へ入る門を、狭い門と呼んでいるのです。しかし、その道は最も喜ばしい道なのです。その道は最もやり甲斐のある幸せな道です。その道はこの世が与えることのできない、平安と感謝を与える道なのです。そしてこの道を歩き続けるためには、一つの条件があります。それはイエス・キリストの柔和と謙遜を学ばなければならないということです。

真理を発見しようとき迷っていた人間が、創造主でありあがない主であられるイエス・キリストに出会うと、過去に送っていた罪の道がどんなに愚かであったかが見えるようになってきます。そして彼は罪を憎むようになります。それこそが新しく生まれた人の特徴です。その時私たちは、イエス・キリストに従って生きる永遠の命の道がどれほど素晴らしいものであるか、経験していくことが出来るのです。

「あなたがたも、かつては悪い行いをして神から離れ、心の中で神に敵対していた。しかし今では、御子はその肉のからだにより、その死をとおして、あなたがたを神と和解させ、あなたがたを聖なる、傷のない、責められるところのない者として、みまえに立たせて下さったのである」(コロサイ 1:21、22)と使徒パウロは語りました。使徒ペテロも声をそろえて私たちにこのように訴えています。

「しかし、主の日は盗人のように襲って来る。その日には、天は大音響をたてて消え去り、天体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされるであろう。このように、これらはみなくずれ落ちていくものであるから、神の日の到来を熱心に待ち望んでいるあなたがたは、極力、きよく信心深い行いをしていなければならない。その日には、天は燃えくずれ、天体は焼けうせてしまう。…愛する者たちよ。それだから、この日を待っているあなたがたは、しみもなきはずもなく、安らかな心で、神のみまえに出られるように励みなさい」(Ⅱペテロ 3:10～12、14)。

## 2

## 高価な恵みを求めて-恵みの真の意味

クリスチャンが最も喜んで使う単語があるとすれば、それは「恵み」という言葉でしょう。罪を赦していただくために、または祝福をいただくために、あるいはすべての問題の解決策としてこの「恵み」が強調されています。しかし、多くのクリスチャンは、「恵み」の真の意味を理解しないまま、何でも恵みだ、恵みだと言って、神様の恵みを安売りしているように思えます。私たちは、聖書が教える「恵み」の本当の意味をはっきり理解する必要があります。

使徒時代以後、キリスト教会の成長と共に教会はだんだん世俗化していき、恵みには代価が伴うということが、徐々に忘れられていきました。しかしキリストと十二弟子たちによって教えられた聖書の真理は、中世の宗教暗黒時代にも少数の人々によって伝えられていきました。「恵み」にはキリストの招待が含まれていて、その招待に答えるためには、それに対する犠牲的な対価を支払わなければならないという真理を理解していた人たちが残っていました。そして彼らは、キリストのゆえにすべてを捨てて、日ごとにキリストの命令に従うために力を尽くす生涯を送りました。修道院制度は後には行いによる義の代表的な例として、本来の姿からかけ離れてしまいましたが、初期の修道僧たちの敬虔な動機と目的は聖書の教えと一致していたものでした。彼らはキリスト教会に入って来る世俗的な精神と安価な恵みに対して、静かな抵抗を表明する見張りの役割を果たしました。しかし、年々豪華になり、俗受けのするような教会を作り上げた、教会の行政を担当する聖職者たちや神父たちは、修道院制度を、教会組織の墮落した姿を隠すための隠れミノとして利用している面がありました。

### 3

## ルターの召命

16世紀宗教改革時代になると、神様は安価な恵みに対して純粋な福音の真理を回復するために修道僧であったルターを改革者として選ばれました。



彼は若いころ死の恐怖に襲われ、信仰の必要を悟り修道院へ入りましたが、そのすべての過程は、聖なる神様の摂理によって導かれたものでした。ルターは神様に完全に服従し、キリストに従うためにこの世のすべてを捨てたクリスチャンでした。彼は真実のクリスチャンとして歩み続け、この世が与えるバラ色の誘惑を断ちました。

しかしルターも修道院生活の最初の頃は、個人的な願望の実現や、自己目的の達成に努めようとしていました。そのような彼に神様は、キリストに従う道は「自分を捨て、自分の十字架を負う」道であり、神様の召命に答えることであり、

自己実現の道ではないことを聖書を通して教えて下さいました。

霊的な目が開かれたマルチン・ルターは、修道院制度がキリストの弟子たちの素朴で謙遜な奉仕から離れて、自分自身の功績を築き、極端となり、霊的な高慢に陥っている現実を見ることになりました。世俗心という悪魔が修道院の心臓部にまで入り込み、そこには言い難い混乱が生じていました。この世を捨てようとしていた修道僧たちが、いまや、修道院の中でこの世の精神を追い求める姿に変わっていったのです。神の国と神の義を求めなければならない宗教界が、この世の国とこの世の義を求めようになり、宗教が形がい化し墮落していた時代に、ルターは聖書を通して、キリストの福音の真実を、神様の恵みの力を体験するようになりました。しかし、彼がこの神様の恵みを発表し出すと、ほとんどの修道僧たちが彼に対抗して立ち上がりました。

ルターは、人類を救おうとして手を差し伸べておられるキリストを通して、神様を見上げました。ルターは信仰の手を伸ばして『信仰による義人は生きる』という使徒パウロが言った言葉を握りました。そうして彼は「かりに、私たちが出来ることが何一つないとしても、私たちは信仰によって善なる生涯を生きることが出来る」と語りました。人は、救われることも、その後の成長も、すべて信仰によらなければならないことを悟ったのです。

キリストが彼のために備えて下さった恵みは、お金では買えないほどの絶大な恵みであるという事実が、彼の自我心を粉々に砕きました。そうして彼は、もう一度網を捨ててキリストに従うことになりました。彼が初め修道院に入った時、彼はこの世のすべてを捨てたのですが、決して自分自身を捨てたではありませんでした。しかし今や彼は、残された自我さえも捨てる事が出来るようにされました。

そうやって自我を捨てると、今まで彼を捕えていた、人からよく思われたいという野心や名誉心も、つまらないものに思えるようになりました。彼は救われるための非常な努力をする代わりに、単純に神様の恵みの招きに応答したのでした。ルターは悪魔がささやく「あなたは今まで罪を犯し続けてきたし、これからも犯すだろう。しかし今やすべてが赦されているのだから、ありのままの今の状態に満足して、赦しがもたらす慰めを十分に楽しめばいいのだ」という声を退けました。

やがて彼は、修道院を離れて世に戻りました。彼が世に戻ったのは、この世が善であって清いものであったからではなく、修道院もこの世の一部であるという事実気づいたからでした。かつて彼が修道院に入る時に決心したこの世に対

する放棄は、彼がこの世に戻って来る時にした自己放棄に比べると、子供と大人ほどの違いがありました。彼の改心は、その当時の宗教界に対して、真正面から立ち向かい「否!」と言うことでした。

ルターはキリストに従う歩みは、この世においてこそ実行されなければならないということを悟ることが出来ました。修道院が安全な避難所ではありませんでした。キリストに従うことは、日々の生活の中で成し遂げられなければならないのです。「わたしについて来なさい」というキリストの命令は、毎日の生活の中で、キリストのみ言葉に従うことによって、完全に反映されなければなりません。またそうする時に、神様に従う人の価値観と、世の人々の価値観の間には、絶えず闘争が存在するという事実を知ることが出来ました。

#### 4 誤解されているルターの信仰

ところで、ある人たちは、ルターが悟った福音、「信仰による義」とは、神様の戒めに対するクリスチャンの義務を免除するものだと考えていますが、それは致命的な誤解です。そうではなく、ルターはこの世に生きるクリスチャンは、押し寄せてくるあらゆる世俗の誘惑に対して、徹底的に抵抗する時に、神様の恵みを通して聖く生きることが出来ることを教えたのです。彼は墮落したこの世にあって、キリストに従って生きることが出来ることを説教し、生涯を通して聖なる経験を持続できることを教えました。ルターが伝えた「信仰による義」は、神様が、罪を持ったままの人を義人として認めて下さると信じるのではなく、罪を捨てた罪人を義人として認めて下さると信じることでした。ルターが伝えた信仰は、安易な安っぽい恵みではなく、本当に高価な恵みでした。

彼は、自分のあらゆる罪に対する赦しを受けるには、自分が大変な思いをして築き上げる功績や犠牲によってではなく、全的に神様の慈愛によって与えられる恵みによるものであるという事実を悟りました。彼は、清貧、節制、貞潔を厳格に守る修道僧の生活では救いを得ることが出来ませんでした。以前よりももっと厳粛な心でキリストの召しを受け入れました。彼は神様の御子の死を通して与えられた救いが、どれほど高価な恵みであるかを悟ることによって、キリストの弟子としての道を、強い確信と信仰を持って進むことが出来ました。そしてルターは、神様のみ子イエス・キリストが支払われた代価が余りにも大きいために、そのよう

な大きな恵みを見つめて黙想するクリスチャンは、必ずその人自身もまた犠牲的な代価を支払いながら、キリストのあとを最後までついていくようになることを知りました。

ルターは、修道院で非常にみじめな経験をしている時に、信仰を通してあらゆる罪からの赦しと自由を掴むことになりました。彼は自分の力では決して克服できなかった罪を、十字架の赦しの恵みと、聖霊の力によって克服することが出来ることを悟り、そのような恵みを与えて下さったキリストを以前よりもっと愛するようになり、心からの献身と忠誠を捧げるようになりました。そのような個人的な経験を通して、ルターは、神様の恵みを知った人は、喜んで自分自身のすべてを代価として支払う生涯を送るようになることを悟ったのです。

ルターは、自分自身がキリストの恵みを悟った瞬間、生涯の中で初めてキリストに、完全で純粋な従順を捧げることが出来たと告白しました。ルターは救いの喜びと感謝を体験することによって、キリストの弟子として、完全な献身と忠誠を捧げることが出来るように創り変えられました。恵みは彼にキリストの弟子としての職分を免除したのではなく、使徒パウロのように、もっと熱烈に弟子としての道を歩ませる原動力になったのです。まさにこれがマルチン・ルターが、恵みについて悟ったことでした。

ルターは「ただ恵みによって」だけ人は救われると言いました。しかしルターの後継者たちは、ルターのこの言葉は受け入れましたが、ルターの恵みによる救いの体験を追体験することには失敗して、ルターが語った言葉だけを繰り返しました。ルターの経験を体験できなかった彼の後裔たちは、神様の恵みを悟ったクリスチャンが、当然たどることになる弟子としての道を教えることが出来ず、ただ恵みによって救われるということしか語ることが出来なくなりました。

もちろんルター自身も、救いが行いによらないで、ただ恵みによって救われることを強調していますが、私たちは、彼がそのような説教や教を強調しなければならなかった、状況と背景を理解しなければなりません。彼はその当時、最も熱心で最も厳格にキリストに従うと決心した修道僧たちを対象に説教したという事実を理解しなければなりません。厳しい規律と厳格な生活を通して全てを捧げてキリストに従おうとする人々に、キリストの弟子としての義務や職分を強調する必要はありませんでした。ですから、ルターは当時の修道僧たちに最もふさわしい説教を語ったのでした。

ルターは私たちが何もできなくても、それにもかかわらず私たちは善なる生涯を送れると言いました。さらにどんな良い行いも、私たちを神様の前に義と認めさせることは出来ず、ただ「罪を赦す神様の恵みと慈しみ」だけが私たちに救いの可能性を提供すると言いました。しかしそのような言葉は彼が修道院を出る時、つまり第二回目に、すべてを捨ててキリストに従いなさいという召しに応じる中で語った言葉であることを理解しなければなりません。ルターは人が陥っている罪の深みから救われる唯一の道は、信仰によってキリストの恵みに委ねる以外にないという真理を悟りました。

罪の問題を解決する聖書の教えを明白に理解することによって、ルターは以前にもまして熱心にキリストに忠誠を尽くすようになりました。そして彼は、罪の問題の唯一の解決策として、キリストの恵みを見つめていましたが、決して放縱や怠惰の言い訳として恵みを求めようとはしませんでした。

彼が得た罪の解決策は、人間によって作られたものではなく、神様のみ子によって用意されたものでした。しかし、ルターの後の人たちは、ルターが発見した解決策を、自分たちの体験としないで、神様の恵みを、生まれ変わっておらず、罪に勝利する経験のない人間の心を慰める教理や手段としてしまいました。まさしくそれが、今日のキリスト教界に最も致命的な打撃を与えている、安価な恵みの教えの基礎となりました。

## 5 安価な恵みが招いた災難

もし恵みがクリスチャン生活において、ただの知識に過ぎないのなら、私たちは自分の好き勝手なことをしながら、好き勝手な方向へ行きながら、神様の赦しの恵みが私たちの罪を覆ってくださると信じることとなります。罪深い人間の性質は、最も安い代価を支払ってその恵みを得ようとするのです。

本質的に、人は自分も気が付かないうちに、自分の利己的で世俗的な心を満足させる説教をする牧師や教会を好みます。そして、ルターが言った、「ただ恵みによって救われる」という教えを誤解した人々は、利己的で世俗的な信仰を持つようになり、キリストを受け入れる以前の状態をそのまま残しながら、神様の恵みが自分自身を覆っているという確信を持って過ごすことになりました。

恵みに対する誤った教えによって、教会は深い世俗の海に溺れて行きました。

教会とこの世の違いが無くなり、クリスチャンとこの世の人々の間にあった劇的な対照が消え失せてしまいました。それだけでなく、神様の恵みの価値を悟って、キリストの弟子の道を歩もうとする真実なクリスチャンたちが、教会の中で異常な者として扱われるようになりました。その結果現代では、一週間のうち一回だけ教会に行けばクリスチャンの義務を十分に果たせて、それによって自分の罪が赦されたと考えるクリスチャンたちが大量に生じるようになりました。まさしくこれこそが、恵みに対する誤った教えがキリスト教会にもたらした悲劇です。

今や、人々はこれ以上キリストに従おうとしません。なぜなら、安価な恵みの教えが彼らを弟子としての役割や義務から解放して、キリストに従う道に必ず伴う犠牲的な代価を免除してしまったからです。知的な同意が中心の安価な恵みは、人々が、最も安い代価を払ってキリストについて行けばいいのだと思い込ませています。私たちは安価な恵みの教えが作りあげた結果を見て、厳粛な恐れを感じなければなりません。このような安価な恵みの教えを信じたことによって、最後には滅びてしまうことになる魂に対して、いったい誰が責任をとるのでしょうか。神様の恵みを誤って理解したり、それを個人的に体験できない時、聖書が教える信仰からは大きく外れてしまうのです。

しかも、この安価な恵みを受け入れた人々と、高価な恵みを信じる人々は、同じように「信仰による義人は生きる」と主張しています。これは言葉は同じですが、その目的、方法、結果において内容が全く違う別のものであることを、はっきりと理解しなければなりません。

今日、ルターの意図とは違って、彼の言葉が正反対の意味で解釈されている姿を見る時、深い悲しみを覚えます。罪を愛する心を持ちながら、自我を最も大切なものとしていながら、「キリストの恵みによって救われた。ハレルヤ、十字架を感謝します」と軽々しく口に出している人が多いことを思うと、絶望感に襲われることもあります。もちろん、今日でも、ルターや改革者たちが教えた高価な恵みに対して尊敬心を表わす人々もあります。しかし、安価な恵みの教えに「否!」と言って立ち上がる人はめったにおらず、またそのような人が出ても、狂信者としてすぐに潰されてしまうのです。

人は自分が信じるようになるというのが、聖書が語る真理です。もし私たちが安価な恵みの教えを信じるなら、私たちはそれが教える通りに生きることでしょう。しかし私たちが高価な恵みの教えを受け入れるなら、私たちはキリストの召しに感謝して、それに伴う代価を支払いながら応じることでしょう。



今日多くのクリスチャンは、人は恵みによって救われるのだから、罪を犯し続けても赦されるとか、人間は罪人で罪を犯すしかないのだから、十字架を信じる以外に救いはないと考えています。これは非常に微妙で真理に近いようでいながら、大きな欺瞞の教えです。真の福音は、

「罪を憎み義を愛する新しい心」を私たちに与え、戒めに喜んで従う力を与えます。ところがこの体験を持っておらず、安価な恵みにとどまっ

ている人たちは、「自分を捨て、十字架を負って」キリストに従う人たちを、律法主義者として排斥しようとするのです。キリストの教えに従おうとして喜んで犠牲を払い努力する人たちは、完全主義者とか、極端な人、またはカルトとして異端者扱いされる時代になりました。

その反面、キリストを信じれば何の犠牲も負担も負わなくてよい、人はただ信じるだけで救われるという、安価な恵みの教えは人気があり、そのために、キリスト教はとても人気のある宗教となり、多くの人がキリスト教に改宗できるようになりました。

プロテスタント教会であれば、ほとんどの人がルターの教えを支持し信頼しているはずですが、キリストの弟子になることの本当の意味は忘れられてしまったように見えます。そして、クリスチャンとして当然支払うべき代価が余りにも安く見積もられていて、この安価な恵みの教えを支持する人たちが教会の中で主流となりました。

しかし私たちは、安価な恵みによってもたらされる結果が、ブーメランのようにやがて自分に戻って来るという事実を悟らなければなりません。安価な恵みを伝え、大きな教会を造ることや、多くの信徒数、たくさんの献金を求めて世俗と同じ精神を表し、質素で素朴だったキリストの精神から離れていく教会の姿が見えませんか？クリスチャンの偽善と不道徳を見て、自分たちより悪いと言って教会を軽視する世の人々のせせら笑う声が聞こえませんか？

真理の知識を教えられることもなく、真心からの悔い改めもないまま、安易にバプテスマを受けては「救われました」と言って喜ぶような人たちが、教会を埋め尽くしています。そして、罪を捨て去り神様の戒めに忠実であるように勧められな

ければならない人々に対して、人は神様の恵みによって救われるのだから、「ありのままがいいのだ」とか「あなたはあなたらしく生きればよいのだ」などと言って慰める、無責任な聖職者たちがどんどん増えていっています。

神様の愛と恵みについては語られていますが、キリストに従って「狭い門」から入りなさい、という説教はほとんど聞くことがなくなりました。初期使徒時代の教会で教えられたような真理を、どこで見つけ出すことができるでしょうか。安価な、「ありのままで」という恵みに感激して、自分の命を断頭台や火刑台に投じた先駆者たちの姿をどこで見つけられるでしょうか。

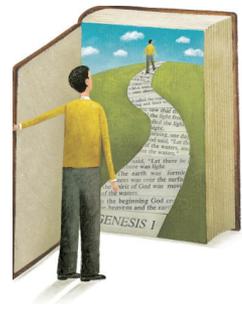
現代のキリスト教会全体にわたって、真に、「神をおそれ、神に栄光を帰する」(黙示録 14:7) 人々、「罪と死の法則」(ローマ 8:2) から解放された人々をどこで見つけることが出来るでしょうか。もしそれが見られないとすれば、それは、いわゆる福音主義者と呼ばれる人たちが、教会の中で安価な恵みを教えた結果として起きた災難なのではないでしょうか。

## 6 救いを取り去る安価な恵み

何の良心の呵責もないまま、不従順の生涯を生きられるように、教会員を準備させることが安価な恵みの教えです。この安価な恵みは、クリスチャンをこの世で善良ではあっても、善に対する力強い証人として立ち上がるようにさせず、生ぬるい中途半端な人たちとして仕立てあげてしまっています。多くのクリスチャンたちが、弟子としての職分を果たさず、キリストの献身的な道具となっていません。

さらに問題なのは、神様の恵みがあるのだから、すべてのクリスチャンはすでに救いが完成されたのだという声を聞く状況になってしまいました。このような教えに慣れている人たちは、キリストが言われた、「自分を捨て、自分の十字架を負って」従うようにという言葉を知ると、びっくりしてしまいます。なぜなら、安価な教えを聞いて育ってきた人たちは、弱い自分を慰めてくれる、自分の状態に合う聖書の言葉しか見ようとしないので、高価な恵みに伴う犠牲や義務について教える聖書の真理に目を向けようとしません。

深い欺瞞に陥ったまま、多くのクリスチャンたちが、安価な恵みを受け入れ自分たちは救われると確信しながら過ごします。彼らの生涯の中で、弟子としての



義務を果たし、従順な生活を送るための実際的な能力が欠如しているにも関わらず、彼らは自分たちのための救いがすでに成し遂げられたと信じています。このような人たちは、聖霊のみ声を正確に聞くことが出来ず、聖霊のみ力が自分自身の実際的な生活の中でどのように働くかを全然理解していません。そのために、今日のキリスト教会において、神様の恵みに対する誤解は、律法主義に対する誤解以上に、恐ろしい災難をもたらしていると言えます。

私たちが安価な恵みの問題点をはっきり理解できないとすれば、聖書を通して私たちを招いておられるキリストのみ声を聞くことができません。私たちは素直な心で、大多数の教会員が真のキリストの弟子としての道を歩んでいない事実を認めなければなりません。たとえほかの人が私たちを、正統派と呼ばれる大きな教団に通う教会員として認めてくれたとしても、私たちがキリストの招きに正直に応じていないなら、私たちは神様の真の教会に属した、本物のクリスチャンではないという事実を認めなければなりません。

私たちは、神様の一方的な「恵み」と「キリストの弟子として歩む」ことの間接的な関係、自分の「新しい生まれ変わり」の体験によって必ず理解しなければなりません。そうすれば私たちは、「どうしてキリスト教会がこれほどまでに弱体化したのか？」という質問に対して明白な答えを見つけ出すことが出来るようになります。

## 7

### 高価な恵みーほんとうの恵みとは

神様のほんとうの恵みを体験した人は、この世で最も幸福な人生を送ることになります。彼らはこの世が与えることの出来ない満足と平和を、心に抱いて過ごすでしょう。その人は、キリストの恵みを通してサタンの権勢に打ち勝つようにされ、へりくだった心でそのお方の限りない恵みを賛美することになるでしょう。

神様の恵みを悟った人は、他の人たちに対して恵み深くなり、キリストの足跡についていくことで、この世のものでは得られない自由を満喫するようになります。またそのことによって、天の市民であることを確信し、決してそれを誇るのではなく、しかし確実に認識しながら生きるようになります。神様の高価な恵みを通して、最も価値ある生涯を送るクリスチャンとして変えられることこそ、私たちがすべてにとってほんとうの福音ではないでしょうか？



「しかし、わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、  
誇りとするものは、断じてあってはならない。この十字架につけられて、  
この世はわたしに対して死に、わたしもこの世に対して死んでしまったのである」  
(ガラテヤ人への手紙6章14節)。

## 第2部

# 真のクリスチャンの道

1

### 真のクリスチャンは十字架を恥としない

**多**くの人がクリスチャンになる時、イエス・キリストを神の子として受け入れることからスタートすると思いますが、それがすべてではありません。クリスチャンとして歩む道には、受け入れることと捨て去ること、信じることと否定することの両面があるのです。しかもそれは、クリスチャンとしての歩みのスタートばかりでなく、その後の歩みにおいても続けられなければならないものです。すなわち、クリスチャンが一生涯の戦いを終えて天の故郷に帰る時まで、日々このことは適用されます。キリストを受け入れるためには、私たちはキリストが憎まれるすべてのことを拒否しなければなりません。クリスチャンの生活には、ただキリストを信じるといっばかりでなく、キリストに服従する、罪を否定するという面があるのです。

イエス様は、自分に従いなさいと人々を召された時、その道がたやすい道だとは言われませんでした。主は、私たちが現在伝道していく時に、人々にあまり話しながらないことをためらわずに語られました。今日の伝道者たちの中で主のように「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」(ルカ9：23)と語る勇気を持っている人がどのくらいいるのでしょうか？そして残念なことですが、安価な恵みの教えを聞いてきた多くのクリスチャンが、険しくて困難のある信仰の道を歩む道徳的の力がありません。

現代社会の道徳的風土は、キリストと使徒たちが伝えた、真理のために迫害されたり困難を受けるというような信仰を好みません。キリストを信じ、この世も適当に楽しみながら生きています。そのような、宗教的温室で作られる虚弱で壊れやすい信徒たちは、過去の時代に、命さえも惜しまずに福音の証人として大胆に宣べ伝え、死をもっておびやかされても、その口を封じることが出来なかった聖徒たちに対して恥ずかしくないのでしょうか。もちろん、それに対する責任は、現代の教会にあります。彼らは人々に、犠牲を払うことなく神様に仕えられるというの

です。そのために、今日の教会は柔弱なクリスチャンであふれています。彼らは何かの楽しみを目あてに教会へ出席します。義を愛するためには罪を憎むべきであり、キリストを受け入れるためには自分自身を否定しなければなりません。

善に従うためには悪の道から離れるべきであるということ、クリスチャンたちはいつ悟るのでしょうか。

この世を友とするということは、神様と敵になるという意味です(ヨハネ 1 2: 4 3 参照)。クリスチャンの人生を送りながら前に進めば進むほど、そして信仰の高嶺を目指せば目指すほど、私たちの前にはさらに多くの訓練、試練が置かれていて、私たちの魂に対するサタンへの攻撃はいつそう激しくなるという事実を教えてください。人はそれほど多くありません。しかし、主のご品性を反映する円熟したクリスチャンになるためには、苦難と苦しみの道を喜んで歩み、なおその苦しみを解決する方法を学ばなければなりません。

イエス様に従う道は、聖霊に満たされた生涯ですが、それは、強盗たちが隠れて獲物を狙っている森を通るような巡礼者の道でもあり、悪魔との凄絶な戦いの道でもあります。聖霊に満ちた歩みは同時にサタンの猛攻撃を受ける道ともなります。時には、生まれつきの自分の本性と必死に戦わなければならない時もあります。私たちが完全に勝利する方法は、勝利されたキリストの道に従うことです。

## 2

## 真のクリスチャンは茨の冠の福音を信じる

この世において、どのように生きどのように死ぬかということは、もっとも根本的な問題と言えるでしょう。しかし私たちクリスチャンにとって、キリストとどのような関係を結んでいるかということは、まさに生死にかかわる最も重要な問題です。イエス・キリストが罪人を救うためにこの世へ来られたこと、そして私たちの功績とは関係なく、ただキリストの恵みによって救われることを聖書が教えているのは事実です。しかしキリストの死によって、自動的にすべての人が救われるわけではありません。そこで私たちの救いは次に述べる、三つの、とても重要な質問に、私たち一人ひとりがどのように答えるかによって決定されると言っ



てよいでしょう。

その質問とは、

- ①「私の外で過去に起きた十字架の救い(客観的な救い)が、今の私にどのように適用されるのか?(主観的な救い)」
- ②「キリストが私のために成し遂げられたことが、どのように私の中で効力を発揮できるのか?」
- ③「救いを得るために私は何をすべきか?」という三点です。

この大切な質問に対して、福音主義のクリスチャンは『主イエス・キリストを信じなさい』『キリストをあなたの個人的な救い主として受けなさい』『キリストを受け入れなさい』というような三つの答えを出すことでしよう。しかしこの三つの答えは皆同じものです。

その結果、最近のクリスチャンたちは『キリストを受け入れる』ことを、あたかも万病に効く薬のように思っています。キリストを受け入れると言さえすれば、どんな問題もたちどころに解決し、悩みも苦しみもなくなってしまうと考えているようです。しかもこのような人たちは、何の痛みも自己放棄もなく、今までの生き方を変えることもないまま、瞬間的な心の衝動によってキリストを受け入れられると信じています。それは霊的な怠慢と言えるでしょう。

そのような信仰で、人は生死を分けるような重大な問題を解決することが出来るのでしょうか。たとえば、もし昔のイスラエルの民が過ぎ越しの血を『受け入れた』後でも、相変わらずエジプトで奴隷生活を続けることを固執したなら彼らはどうなったでしょうか。もし放蕩息子がお父さんの赦しを『受け入れ』た後に、続けて豚の間で生活したならば、どうなったことでしょうか? 同じように、キリストを受け入れるということが、その人にとって何かの効果をもたらすためには、それに伴う行動の変化があるべきなのです。

### 3 キリストを受け入れるとは?

キリストを受け入れるということは「キリストと結合」することを意味します。これはとても特別な経験であり、この結合には、知的な側面、意志的な側面、そして感情的な側面が含まれています。知的な面では、信者はイエス様が自分の主であり、救い主であることを確信します。意志的な面では、彼はどんな代価を

支払ってもキリストに従うことを決心します。その結果感情的な面では、彼はキリストと交わることから来る大きな喜びを味わいます。キリストを救い主として認めるだけでなく、主として認めるためには、心の大きな革命が伴います。真のクリスチャンは、キリストの一面だけを受け入れるのではなく、そのお方のすべてを受け入れます。

キリストのすべてを受け入れて、そのお方が望まれないものを徹底的に否定することは、神様の命令です。つまり、キリストを受け入れるとは「わたしたちもこの世にあって彼のように生きているので、さばきの日に確信を持って立つことができる。そのことによって、愛がわたしたちに全うされているのである」(Iヨハネ4:17)というみ言葉を体験することです。キリストを受け入れる信仰とは、キリストの友を自分の友とし、キリストの敵を自分の敵とすること、キリストの方法を自分の方法とすること、キリストが拒まれたことを自分も拒むこと、キリストの十字架を自分の十字架とすること、キリストの命を自分の命として、キリストの未来を自分の未来として受け入れることです。

『綿菓子のように甘い福音』を教え、日当たりの良い散歩道をのんびり歩いて天国へ行けるような信仰を提供することは、人々を残忍にごまかすことにほかなりません。いわゆる『ライス・クリスチャン』という言葉がありますが、その意味は物質的な利益を目的にキリスト教を受け入れた人たちのことです。福音を提示する時、キリストの弟子になるために支払うべき代価を正しく教えていないため、教会では多くの『ライス・クリスチャン』が生み出されています。

キリストは自分の弟子たちに何を約束されたでしょうか？キリストは、罪の赦し、内面的清潔、神様との平和、永遠の命、聖霊の賜物、誘惑への勝利、復活、栄化、そして、神様と永遠に住まう場所などを約束なされました。これらのものは霊的祝福であって、地上的な物質的なものではありませんでした。

聖書が教える信仰に立った人は、キリストの歩みを習うものとなり、主が勝利されたように勝利していきます。また、キリストがどんな苦しみにも耐えられたように、自分に降りかかってくる苦しみを忍耐し、いばらの冠も与えられるままに受けようとします。それに対して、綿菓子の福音で育てられた人は、克己も犠牲も自己否定も要求されない信仰を好み、何か苦難がやって来ると簡単に信仰を捨ててしまうことになるのです。

## 4 真のクリスチャンは主の『仕事』より『主』に優先順位を置く

クリスチャンは自分をよく吟味する人にならなければなりません。聖書には次のように教えられています。

「キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい」(ピリピ2:5)。

「あなたがたは、はたして信仰があるかどうか、自分を反省し、自分を吟味するがよい。それとも、イエス・キリストがあなたがたのうちにおられることを、悟らないのか。もし悟らなければ、あなたがたは、にせものとして見捨てられる」(Ⅱコリント13:5)。

クリスチャンの心は、いつもキリストの思い、キリストの霊が支配して導かなければなりません。聖霊に満たされて熱心に祈るクリスチャンは、キリストの心を持つようになり、外部の世界に対する彼の反応はキリストの反応と同じものとなっていくのです。彼は周囲の人や物事に対して、キリストのように考え、キリストのように語り、キリストのように行います。このようになった時、その人の生涯は今までは全く違ったものとなります。

しかし、このような歩みは、いつの間にか自然に出来るようになるものではありません。私たちがキリストのように考えるためには、キリストのことをいつも考えていなければなりません。ある人はこのように言いました。「神様は、まるでこの世界に私だけしかいないかのように私のことをいつも思っていて下さる。だから私もまた、この世界に神様だけしかおられないかのように、いつも神様だけを思う。その時初めて、私は神様のお恵みに対してほんの少し恩返しすることができるのだ」。

私たちの周囲の人のことや物事について考える時、私たちはまず、神様ならどうなさるかということを考えるべきです。成熟したクリスチャンは、どんなことに対しても自分で考えて結論を出したりせずに、まず、思いを神様に向け祈ってから、次に問題に対する神様の答えを聞こうとします。天に向かう心を持つためには、天に調和した思考を持たなければなりません。私たちの心が聖化されるためには、神様が私たちの思考を主導されなければなりません。

時代を越え、教理の違いを越えて、大多数のクリスチャンが同意することの一つは、熱心な信仰者ほど、頻繁に、長い時間をかけて神様を黙想することです。もちろん、神様を深く黙想するためには、何よりも健全な聖書の知識を持たなければなりません。聖霊の感動によって記された、聖書の中に現されている神様の啓示を離れて、神様を求めることは何の益にもならないばかりか、危険なことです。

今の時代においてクリスチャンの中に、真に偉大な聖者を見つけ出すことが難しいのはなぜでしょうか？その理由の一つは、私たちが神様を知ること十分な時間を投資しようとしなないためです。

現代のクリスチャンの多くは、残念ながら、「活動主義」の犠牲者たちです。誰かが表現したように、いわゆる「仕事の福音」が教会に入り込んできて、「キリストの福音」を押し出しました。そのために「主のわざ」を行っていると言いながら、その人たちは「わざの主」と接触することを忘れてしまっています。自分たちの教会は神様に祝福された生きた教会だ、と誇る牧師たちにしばしば出会います。彼らは朝から晩までぎっしり埋め尽くされたスケジュール表を、その証拠として提示します。しかし、牧師が忙しく動き回っていることが、その教会が霊的に成長し、キリストの品性が反映されているわけではないのです。

今多くの教会で行われている活動が、本当に罪人を悔い改めと救いに導き、信者を聖くしているのなら、それは尊い働きと言えます。もしそうでなく、ただたくさんの人を集めること、そのために世俗に受け入れられやすい説教や音楽が提供されているだけなら、そのような騒がしく忙しいだけの活動は中止されなければなりません。そして、静かな孤独の中で神様と交わり、聖霊の豊かな実を結ぶことを中心にした教会生活に変えられなければなりません。

私たちが静かな細い神様のみ声を聞いて、神様を感じられるようになるまで、神様は待ってられます。聖書を深く黙想して、聖書に啓示された神様を信仰によって受け入れて下さい。これが神様を知る最高の方法です。

自分たちは他の人たちよりもっと聖いと思っているクリスチャンは、そのような優越感を持っていること自体が、それほど聖くないという十分な証拠になります。真に聖い人とは、自分がキリストのいやしい僕に過ぎないことを知っており、ただなすべきことを行っているだけのものであることを自覚しています。彼は、たとえ祈りが聞かれ、素晴らしいことが起きたとしても、得意になったり有頂天になったりせず、ただ謙遜に神様のみ名をあがめます。

ジョン・ウェスレーは、ある教会員たちにこのように語りました。

「私が見るところ、教会は愛において完全になっていません。なぜなら、彼らはどのようにすれば聖くなるかについて学ぶのではなく、宗教を楽しむために教会に出席しているからです」。

いつの時代でも、苦しみや恥ずかしめに直面することを恐れず、真理のために、神様の栄光のために生きる人は真に靈的な人といえるでしょう。彼はどんな犠牲を払っても、神様に栄光を帰すために生きることを喜び、そのお方の栄光を現すことだけを熱望します。

逆境や艱難は、義人にも悪人にも同じように訪れるものです。多くのクリスチャンはそのような艱難を「十字架」と言いますが、実際の私たちが負うべき「十字架」というのは、私たちがあえて受ける必要のない艱難を、キリストに従うゆえに受けることを意味しています。真に靈的な生き方とは、キリストに従うことによって、サタン勢力からのあらゆる批判や中傷、艱難を引き受けることです。真に十字架を負う生活とは、キリストと結びつき、キリストの命令に絶対的に従うことです。

そして、すべての出来事を神様の観点から見ることが、靈的なクリスチャンです。あらゆることを神様の秤で測り、神様が単に表面だけではなく本質を見抜いて評価なさるように、物事の本質を評価できることが、聖霊に満たされた生き方の印です。肉的なクリスチャンは、本質を見ないで表面的なことだけを見るため、起きてきた現象によって得意になったり落胆したりします。靈的なクリスチャンは、たとえ困難に直面しても神様の観点で全てを判断し、キリストの苦しみにあずかることをむしろ喜ぶようになります。

真に靈的な人の特徴は、正しく生きることを選択することです。成熟したクリスチャンの特徴は、この世にあって、この世を超越した生き方をすることです。この世を愛してこの世に執着するクリスチャンは死を恐れます。聖霊によって生きる人は、地上の命に執着せず、与えられた人生をどのようにして神様の栄光を現す

かということを考え、神様の戒めの正しさを世に示すことだけを考えて残りの生涯を過ごします。彼は、神様が命を支配しておられることに信頼し、長くても短くても、すべてを神様にゆだねて、人知では計り知れない神様にある平安のうちに過ごします。

聖霊に満たされたクリスチャンのもう一つの特徴は、他の人たちが成長できるように自分自身を喜んで犠牲にすることです。彼は他のクリスチャンを自分自身よりも高く評価し、自分が注目されなくても相手が向上することを見て喜びます。彼の心には妬みがありません。信仰の兄弟たちが誉められることを喜びます。なぜなら、それがまさしく神様のお心であり、そのような神様の愛のお心が満ちる所こそ地上の天国だからです。神様の喜ばれることを行うことがクリスチャンの喜びであり、特に傷ついた人や心に悲しみを持つ人が喜ぶようになるのであれば、自分の尊厳も喜んで犠牲にします。

## 8 無料交換

キリスト教の根本は「あがない」の教理です。あがないとは、罪人の罪が救い主に移され、私たちが罪を赦された者として神様の前に立つことが出来るようになったことを意味します。キリストが十字架で死なれたことによって罪人が罪から逃れ、キリストの義を受け取ることができるようになりました。しかしこれはあがないの計画のはじまりに過ぎません。あがないとは、この後もすべての悪いものを良いものに交換する過程の連続です。罪は義と交換され、次は「神様の怒り」が「神様の受容」に交換されます。さらに、死ぬべき命から永遠に生きる命へと交換されます。神様はこのようにして、イエス様が持っておられたすべての良いものを私たちに与え、罪人が持っていたすべての悪をイエス様に移されるのです。

神様の方法と人間の方法は異なります。神様は、今まであったものを繕ってもう少し良いものにするようなことはされません。神様は、人間を全く新しい人に創り変えて下さるのです。神様は私たちに、新しい命を与え、古いものを破壊する作業に着手されます。

またクリスチャンは、弱い者が強い者に交換されます。「わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからです」(Ⅱコリント 12:10)。実際には、最も強い状態にある純粋な聖徒であっても、彼自身の本質は、改心の前と同じく弱い存在です。しかし、改心を通して与えられた変化は、そのような弱い人間の性質が改良されたようなものではなく、神様の無限のみ力によって生きるようにされた力を受けるとい

うことなのです。その時彼は、弱さを強いものと交換しました。もちろんその交換の後も彼の強さは、彼自身のものではありません。その強さは、彼がキリストの中に留まる間だけ、神様から彼に流れ入って来たものです。

## 9 真のクリスチャンは信仰の基本に忠実である

この世の中を生きて行く時に、真実と悪を見分けることがとても難しく、誤りから完全に逃れることが難しいことがあります。クリスチャンであっても例外ではなく、知らないうちに、考えや判断、行動が誤りに陥ってしまっていることがあります。従って敏感な霊的識別力を持つことはとても重要なことです。そこでクリスチャンは、神様が自分たちをそのような混迷から救うために設けて下さったあらゆる手段を十分に利用することが何よりも大事なことです。その手段というのは、祈り、信仰、たゆまないみ言葉の黙想、従順、謙遜、真摯な思索、聖霊の照明などです。

正しい祈りと聖書から発見される神様の「啓示」を信じる信仰、さらに悟りと知識を与える聖書の言葉を、昼でも夜でも時間があるごとに黙想して、その言葉に服従することはとても重要なことです。しかし人は高慢になると真理から離れやすくなります。

またクリスチャンは、思索する人にならなければなりません。思索しない人の心には、多くの真理が宿ることはできません。と言っても、聖霊の内的照明がないような思索であるなら、それは全く無益であるばかりか、人を誤った方向へ導く大変危険なものです。聖霊が与えられるように謙遜な心で、私たちの心が照らされるように祈りながら瞑想しましょう。私たちは決して聖霊なくして生きようとしてはならないのです。

## 10 真のクリスチャンは変化を信じる

あるクリスチャンたちは、人間の品性が完全に作り上げられるための神秘の力が、時間があると錯覚しています。そしてある人が、クリスチャンとしてふさわしくない行動をとった時、時間がたてばいつか彼も聖い人として変えられるに違いないと期待します。しかし、愚かな者を賢者とするもの、悪人を聖者として創り変えるあものは、決して「時間」ではなく「変化」です。より正確に言うなら、キリストが人々の心に「変化」を起こされたことによって彼らが変わることです。

キリスト教会の迫害者であったサウロが変化して神様の僕パウロになったのは、時間が作りあげた変化ではありませんでした。その変化をなし遂げられたお方は、水をぶどう酒に変えられたキリストでした。若い時に衝動的で強情だった人が、年老いてモーセやヤコブのように変わったことを見る時、私たちは歳月がそのような変化をもたらしたのだと、単純に思ってしまう傾向があります。しかしそれは、時間がそのようにさせたことではなく、神様がその変化をなし遂げられたということなのです。多くの罪人は、この変化を後回しにしている、いつまでも時間は自分の味方になってくれると漠然と信じています。しかし彼が本当のクリスチャンになれる可能性は、時間が経てば経つほどますます減少していくことになります。

私たちは「主にお会いすることのできるうちに」主を尋ね求めるべきです。「近くおられるうちに呼び求めて悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人は、その思いを捨てて」、主に帰らなければなりません。そして悔い改めて、品性の変化をいただいて聖霊の実を豊かに結ぶ真のクリスチャンにならなければなりません。そして信じた最初の時だけでなく、その後の全生涯、死がやって来る時まで、私たちは霊的な完全に向かって常に前進していく歩み続けなければなりません。皆様も、聖霊の力と恵みを体験することによって、毎日、変化と成長のある真のクリスチャン人生を送られることを心から願っています。



# SOSTV Japan Mission 紹介



## 1. sostvjp.net

聖書研究用書籍、BibleNavi小冊子(32シリーズ)、インターネット説教、ブログ、SNS、書籍を多数揃えています。(今後も、料理番組、預言セミナー、ダニエル書、黙示録研究書籍、信仰書籍、月刊誌などをご用意する予定です。)

## 2. 書籍



聖所



手遅れになる前に



福音の力を体験せよ



Remember Me



新生への道



信仰のリバイバル

## 3. YouTube <JAPAN SOSTV>

SOSTVジャパンミッションの礼拝用説教、ショートメッセージ、聖書セミナー、聖書研究、預言研究の動画等をご覧になります。



SOSTVジャパンミッションのすべての資料は無料でお届けしております。

この時代に真理の教えを祈り求めておられる皆様、いつでもこちらの電話番号やメールアドレスにご連絡ください、資料をご請求いただければ幸いです。

**TEL: 050-1141-2318 E-mail: sostvjapan@outlook.com**



## SOSTV WORLD

日本	050-1141-2318, sostvjapan@outlook.com
韓国	1544-0091, sostvkr@hotmail.com
中国	sostvnet@hushmail.com
アメリカ	1-320-500-1004, sostvus@hotmail.com P.O.Box 787 Commerce, GA 30529
ニュージーランド	0800-42-3004(フリーダイヤル), 649-420-2556, sostvnz@gmail.com
オーストラリア	0425-284-718 sostvau@hotmail.com



## SOSTVにご支援を希望されますか？

SOSTVは、読者の皆さんの後援で運営されている宣教ミニストリーです。皆さんの真心からお贈りくださる尊い献金は、より多くの方々に真理をお届けするために、大切に、また慎重に用いさせていただくことをお約束いたします。冊子をご覧になり、心に感銘を受けられた方は、次の口座に後援のほどをよろしく願いたします。

### 【後援案内・振り込み先】

ゆうちょ銀行  
記号 10570  
番号 48323841  
名称 SOSTV ジャパン ミッション

### （他銀行からの振込み）

ゆうちょ銀行  
店名 〇五八  
店番 058  
預金種目 普通預金  
口座番号 4832384  
支店名 大多喜郵便局



sostvjp.net

Save Our Souls

.....

それからイエスは弟子たちに言われた、  
「だれでもわたしについてきたいと思う  
なら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、  
わたしに従ってきなさい。

(マタイ16:24)

.....